

中世文学における対話

小島 孝之

今回の研究集会のテーマは、「手紙と日記—対話する私／私との対話—」です。「対話する私」が手紙に対応し、「私との対話」が日記に対応するのでしょうか。その逆の対応関係もありそうに思えますが、「手紙」—古典では、「消息」という言い方が普通でしょうから、以下では「消息」と言い換えさせていただきます—と「日記」が「対話」に最も深く関わると考えられるので、こういう標題になったのだらうと推測しますが、考えてみれば、「書くこと」は、そもそも対話と切り離せないものではないでしょうか。

「書く」ことは「読む」ことを前提にしています。書くという行為は常に読者の存在を前提にして成り立つものでしょう。墓に埋められる墓碑銘は、では誰が読むのか？ エジプトの王の墓に刻まれた碑文は誰が読むことを予想しているのでしょうか？ 疑問はいくらでも浮かびますが、しかし、それらも、甦った王の魂が読むとか、死者が赴く冥界の支配者、すなわち、神が読む、とか、現実の人間ではないかも知れないが、やはり誰か「読み手」が想定されているに違いありません。

つまり、「文学」あるいは、もっと一般化して「書記行為」は、「読み手」即ち読者の存在を前提にしているというのが、基本的性格だといえるのではないのでしょうか。であるならば、必ずしも、「消息と日記」に限定されるものではないまい、というのが、今日の私の立場である、と最初に申し上げておきます。それで、「消息と日記」を中心にしつつも、やや広く対象を拡げて話をさせていただこうと思います。

読者の存在が不確実な場合、あるいは読者の欠如した状況では、自問自答が

行なわれることになります。自分自身を読者として仮構する、あるいは、読者の身代わりになる、または、理想の読者を自ら演ずる、というのが、自問自答の本質ではないかと思います。

例を『方丈記』に取ってみましょう。『方丈記』はいったい誰を読者として想定して書かれているのでしょうか。いくつかの案は出されていますが、本当のところは、やはり、よく判らない。特定の読者を想定することが、なかなか難しい作品です。しかし、任意に例を取りますが、最初の五大災厄の記事の中にも、

人の営み、皆おろかなる中に、さしも危ふき京中の家を造るとて、宝を費やし、心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍る。

とあるように、「侍り」という丁寧語が使われていることから、読者を意識した文体であることは明白です。しかるに、あの有名な末尾の文章、

そもそも一期の月影かたぶきて、余算の山の端に近し。たちまちに三途の闇に向かはんとす。何のわざをか、かこたむとする。仏の教へ給ふ趣きは、事に触れて、執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし。いかが、要なき楽しみを述べて、あたらし、時を過ぐさむ。静かなるあかつき、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひていはく、世をのがれて、山林にまじはるは、心を修めて道を行なはむとなり。しかるを、汝、姿は聖人にて、心は濁りに染めり。住み処はすなはち、浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、わづかに周梨槃特が行なひにだに及ばず。もし、これ、貧賤の報のみづからなやますか、はたまた、妄心のいたりて狂せるか。その時、心、さらに答ふることなし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。

という自問自答で締めくくられます。これは、誰か明瞭な特定の読者を意識したものではないでしょう。むしろ、ある理想の読者（この場合、仏の立場かもしれない）を仮構し、身代わりとなって自ら答えるといったていものではないでしょうか。仏の立場を理解しうる読者一般を想定していると、言い換えることが出来るかもしれません。

この『方丈記』の末尾の自問自答は、西行の歌、

うらうらと死なむずるなと思ひ解けば 心のやがてさぞと答ふる（『山家集』・一五二〇）

との類似がすでに指摘されています。「心を師とせざれ」というのは、『発心集』にも引用されている、仏教者には馴染み深い教訓ですが、このような超越的思念に答えるのは仏の立場に立ったもう一人の自分が答える以外にないはずで

す。孤独な遁世者の思念に、自問自答は必然なのかも知れません。あらためて、『方丈記』の自問自答における書記行為が孕んでいる、前提としての読者の存在の問題が浮かび出てくると言えるのではないかと考えます。書記行為は、「読み手」即ち、語りたい事の真意を理解してくれる読者との対話への希求を内包する、というふうに言っておきたいと思います。

さて、今、例に取った鴨長明は遁世者です。いわゆる世捨て人ですが、そうした人物たちが、また、中世文学の担い手にもなったという事実はよく知られた事柄です。

世を捨てるという行為と、対話、ということの関係を、少し考えてみたいと思います。世俗を捨てて遁世の道に入るということは、家族を含めて世俗の間関係を断ち切り、捨て去ることを意味します。西行の出家の際のエピソード―最愛の娘を縁から蹴落として出家を遂げたという、『西行物語』が描くエピソード

ソードは、事実かどうかは判りませんが、そうした観念を示すよい例でしょう。仏教説話にしばしば引用される、『大集經』卷十六「虚空藏菩薩品」の偈、「妻子珍宝及王位、臨命終時不隨者。唯戒及施不放逸、今世後世為伴侶」という句は、『往生要集』『大文第一』にもそのまま引用されています。この句は『往生十因』にも見られますし、無住の『沙石集』や『聖財集』などにもしばしば見られます。これも馴染み深い言葉と言って差し支えありませんが、「ただ独り生きる」覚悟を要請しています。死に向かう人生には同道する者がいないという自覚が促がされているのです。『一言芳談』にある、「出家遁世の本意は、道のほとり、野べの間にて死せむことを期したりしぞかし」という明遍の言葉に端的に表れている、いわゆる「野垂れ死に」の覚悟です。それは、遁世者は、絶対的な孤独を生きることが、求められている、ということであると思います。

そうであるからこそ、遁世者は、我と同じ心を持つ者の存在を希求することになるのではないのでしょうか。同行即ち同心者への希求は、差し迫った希望でもあったのです。

そのことを、西行の和歌に見てみましょう。

いづくにか眠り眠りて倒れ伏さん思ふ悲しき道芝の露（『山家集』・八四四）
死にて伏さん苔の筵を思ふよりかねて知らるる岩陰の露（同・八五〇）

は、右にみた野垂れ死にの運命への思いを歌っています。この孤独な心と二重写しのように、同行を求める心が歌われてもいます。

もろともに影を並ぶる人もあれや月の洩りくる笹の庵に（同・三六九）
寂しさに堪へたる人のまたもあれな庵並べん冬の山里（同・五一三）
ひとり住む庵に月のさし来ずはなにか山辺の友とならまし（同・九四八）
あはれ誰が草の庵の寂しさは風よりほかに訪ふ人もなき（同・一一四八）

これほど、草庵の孤独と、同心者を求める心を歌い続けた歌人も少ないかもしれません。そうした心は、草庵の傍らに立つ松を、人に見立てて共感を求め、我が心を投影します。

谷の間にひとりぞ松も立てりける我のみ友はなきかと思へば（同・九四一）

庵の前に松の立てりけるを見て

久に経て我が後の世を問へよ松跡偲ぶべき人もなき身ぞ（同・一三五八）

ここをまた我れ住み憂くて浮かれなば松はひとりにならんとすらん（同・一三五九）

このような、遁世者の表現が、「誰でもいい、心を共有できる者と語り合いたい」という、対話希求の一方の核であるとする、もう一方の核には、特定の読み手を念頭に置いた対話があります。日常の、口頭で行なわれる対話の代替として記述される対話は、消息です。たとえば、『紫式部日記』の中のいわゆる「消息文」は、果たして娘賢子へ宛てた消息なのかどうか明らかではないかもしれませんが、

御文にえ書き続け侍らぬ事を、よきも悪しきも、世にある事、身の上の憂へにても、残らず聞こえさせ置かまほしう侍るぞかし。けしからぬ人を思ひ、聞こえさすとても、かかるべきことや侍る。されど、つれづれにおはしますらむ。また、つれづれの心をご覧ぜよ。また、おほさむ事の、いとかうやくなしごとおほからずとも、書かせ給へ、見給へむ。夢にても散り侍らば、いといみじからむ。またまたもおほくぞ侍る。このころ反故どもみな破り焼き失ひ、雛などの屋づくりに、この春し侍りにし後、人の文も侍らず。紙にわざと書かじと思ひ侍るぞ、いとやつれたる。ことわろき方には侍らず。ことさらに、ご覧じては疾うたまはらむ。え読み侍らぬところどころ、文字落しぞ侍らむ。それは、何かは、ご覧じも漏らせ給へかし。かく世の人ごと

の上を思ひて、はてに閉ぢめ侍れば、身を思ひ捨てぬ心の、さも深う侍るべきかな。何せむとにか侍らむ。〔『紫式部日記』〕

と、口頭の対話と消息が代替可能なものと認識されています。また、ここには、「つれづれにおはしますらむ。また、つれづれの心を御覧ぜよ」ともあり、互いの無聊を慰める行為でもあることが示されています。

阿仏が娘の紀内侍に宛てて書いた『乳母のふみ』や、大神基政の『龍鳴抄』などの楽書もまた、消息の文体で書かれたテキストです。消息の形式で書かれた中世のテキストについては、近年、中野貴文氏らによって、精力的に分析が加えられておりますので、詳しくはそちらに譲りたいと思いますが、中野氏が指摘しているように、消息という形式を取ることによって、個人の意見を開陳し、他者の同意を求める、という機能が働いていると見られることは重要な問題であると思います。

『無名草子』に、

この世にいかでかかることありけむと、めでたくおぼゆることは、文にこそ侍るなれ、『枕草子』に返す返す申して侍るめれば、事新しく申すに及ばねど、なほいとめでたきものなり。遥かなる世界にかき離れて、幾年あひ見ぬ人なれど、文といふものだに見つれば、ただ今差し向かひたる心地して、なかなか、うち向かひては思ふほども続けやらぬ心の色もあらはし、言はまほしきことをも、こまごまと書き尽くしたるを見る心地は、めづらしく、うれしく、あひ向かひたるに劣りてやはある。つれづれなる折、昔の人の文見出でたるは、ただその折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。まして亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、歳月の多く積りたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。たださし向かひたるほどの情けばかりにてこそ侍れ、これは、昔ながらつゆ変ることなきも、めでたきことなり。〔『無名草子』〕

とあるように、場合によっては、直接の口頭による対話では語り尽くせぬ細かな心の襞を吐露しえる媒体でさえあるのです。

読み手が心を許せる特定の相手であれば、前述の『紫式部日記』にあったように、他人に見られたら困るような事柄が、縷々と記述されることもあります。しかし、偶然であるか否かは識別できませんが、そうした他見を憚るべき消息文が、現に後世に伝わっているわけで、書き手も、その消息文が、不特定の他者の目に触れる蓋然性に気づかなかったということは、ありえないでしょう。これも前述した大神基政の『龍鳴抄』の跋文には、

つれづれなるままに、手習ひの時々、させる日記もひかず。そのしるしともなき事を、心におぼゆるままに書き付けたり。おのづから末の世に見む人は、さもありけることかなと、思はむずらむ。又、これはひが事よといふ人もあらむずらんむ。あはれなる事かなと思ふ人もありなむ。にくかりける事かなといふ人もありぬべし。世にかくれたらむ折りは、人に見すべからず。もし、いとおしみあらむ人は、見む折々、必ず念仏を申すべし。子孫なりとも、好まざらむ人に取らすべからず。さらむ折りは、法華經の料紙に破りて加ふべし。もしは、破りがたくば、焼き捨つべし。

行く方も知らずなるとも水莖の跡はとまらぬことぞ悲しき
好まむ人には隠すべからず。その器は物叶ひたらむ人には惜しむべからず。

とあります。私が死んだら人に見せるな、と言っていますが、その直後に「いとおしみある人」「好まむ人」には隠さず見せよ、と言っており、「水莖の跡」が「とまらぬこと」を「悲しい」とまで歌っており、基本的には、この消息体テキストは後世の人に読まれることを期待しているのです。同じような心情は、阿仏の『うたたね』の末尾にもあります。

我より久しかるべき跡なれど 偲ばぬ人はあはれとも見じ (『うたたね』)
ここで言っている「人」が、特定の、自分に冷たい恋人であるとしても、こ

の文言は、そうした個別性を超えた普遍性を持つ表現となっていると言えるでしょう。ものを書く人間が、自分の書いたものを誰にも読まれないということを期待するはずはない、と断言しても構わないと思います。

死後の読者となれば、それは、もはや、不特定多数の読者ということとほとんど変わることがないでしょう。

こうしたものが、消息の形式でなぜ書かれるのか。それは大事な問題だと思いますが、前述しましたように、現在進行形で研究が進行中ですから、そちらにお任せしようと思います。ただ、すでに指摘されている特徴的な事柄の一つに、楽書などは、正統な後継者の不在の危機にこそ、書き留められる、という点は注意しておきたい事柄です。

我が家の後継者の不在を嘆き、自らの貯えた膨大な知識の失われることを惜しんで、記録を残そうとする心情が、口伝の書き留めを生んでいるのは、大江匡房の『江談抄』にも見ることができます。

命せられて云はく、「つらつら物情を案ずるに、官爵と云ひ、福祿と云ひ、皆文道の徳をもつて経たるところなり。何ぞいはんや才芸名誉の殆ど中古の人に過ぐるをや、と思ひ給ふところなり。自讃に似たりといへども、また謂れなきにあらず。寿命においては七十に及ばんこと、近代の有り難き事なり。短寿の類にあらず。顔回は至聖なるも、僅かに三十か。よりて世間の事もはら思ふところなし。ただ、遺恨とするところは、蔵人頭を歴ざると、子孫がわろくてやみぬるとなり。足下などのやうなる子孫あらましかば、何事をか思ひ侍らまし。家の文書、道の秘事、皆もつて煙滅せんとするなり。就中に、史書、全経の秘説も徒にて滅びんとするなり。委ね授くる人なし。貴下に少々語り申さんと欲ふ。いかん」と。答へて云はく、生中の慶び、何をもつて如かんやと。（『江談抄』第五「都督自讃の事」）

我が家に、自らの学問・有職故実を伝えるべき子孫が不在で、煙滅せんとしているとの危機意識が、若き俊秀、藤原実兼に対して語り伝えようとする動機になっており、実兼がこれを筆録することを望んでいます。ここにも、特定の相手に対して行なわれるべき口頭伝承がその代替行為としての、書記行為を要請し、不特定の読者への広がりや許容しているさまが見て取れます。説話の書き留めもまた、消息と地続きであると言えるかと思います。

また、消息を書き記す行為と、近しいありようとして、かな日記を挙げることでできるでしょう。

すでに、『紫式部日記』には「消息文」との関係で触れましたが、ここでは、飛鳥井雅有の日記を取り上げてみようと思います。雅有はいくつもの仮名日記作品を残している珍しい存在ですが、29歳の文永6年（1269）に記したものとおもわれる、『嵯峨のかよひぢ』の冒頭を引いてみます。

過ぎにし春の陸月より、芦屋の里を住み離れて、花の都に帰り上りたれど、早くより病身を去らぬものなれば、近き衛りの名のみして、曇井のよそに隔たりて、小倉の山の麓に、母なる人の山里あれば、籠もりゐて月日を送る。いにしへ、前中書王の住み給へる辺りなれば、いと懐かしくて、都の住居もものうくて、心を養ふばかりを、取る方にてあり。かかる所の秋のあはれは、何処よりも心とまる。つれづれと眺め過ぐすに、この辺りに入道大納言為家卿なん、いにしへより住みけり。この人は代々の昔より知る人なりければ、折々は情けを通はし、対面しけり。そこより、『土佐の日記』、『紫の日記』、『更級の日記』、『蜻蛉の日記』などをおこせたり。まことに女の事なれば、^虫□□んなり。男も仮名に書くらん事、この国のことわざなれば、故あり。『伊勢物語』も、秋津島の文字にてぞあるべしなどいふ。麗しき事は、げに真名にてもありなん。されば、その方はさやうに書きぬ。歌方などは、かやうにこそあらめと覚ゆれば、今より書き付く。過ぎにし方の事をも、思ひ出だして書き加ふべし。

と、序文にあり、「麗しき事」と「歌方」に分けて、漢文日記と仮名日記に書き分けることを宣言しています。「麗しき事」というのは、飛鳥井家の家の道である、鞠に関わる記録であるようですが、仮名日記には雅有の個人的な行為、就中、為家とその婦人である阿仏との交流を中心に書かれています。為家宅で拝見した平安朝の仮名日記を見て感動し、その影響を受けて書き始めたものかと推測されますが、公的側面と私的側面に分けて、漢文日記と仮名日記を使い分けようというのですが、それにしては、仮名日記といえど、雅有の日記は、さして内心が明かされるわけでもなく、他見を憚るような内幕や心情の吐露があるわけでもなく、至って単調、平明な日記に終始しています。おそらく、書かねばいられない何らかの強烈な内的衝迫に迫られて書いているわけではなく、ただ、古の古典日記に対する憧れから、同じように日記をものしてみようといった動機に根ざしていたからではないかと思われます。

しかし、その雅有も、優秀な後継者たる息子雅顕を失った40歳近いころ、

都の住るも思はずに、今年四年になりぬるにや、過ぎにし三年の程は、うち
続き心の闇にのみくらされながら、涙のひまひまには、出でつかふこともあ
りしかども、よろづものうくて、記すこともなかりき。

と述懐しています。後継者を失った悲嘆が、彼の執筆活動を止めてしまったわけです。再び書くという行為を復活させるためには、その悲嘆をどのようにか受け止め、昇華する何物かが必要であったわけでしょう。書くという行為をなすには、どこかで、自分自身を客観的に、第三者的に、対象化して眺められる視点が用意される必要があったのではないか、と思われます。しかし、雅有がそういう日記作品を残さなかったのは、あるいは、彼の生活の中に占める公私のありようと関わるかもしれません。

さて、このように、対話をめぐって、中世を中心に恣意的に文学の諸問題を

論ってきましたが、やはり、『徒然草』の問題を取り上げないで済ますことは、許されないでしょう。しかし、この問題については、先ほども触れた中野貴文氏らが精力的に研究を進めており、私にそれを越える考えがあるわけではありませんので、そちらの一連の論文を参照していただきたい、と思います。

ここでは、『徒然草』という前例の乏しいテキストが、書くことと、対話とをめぐる多くの問題を提起するものであることを、あらためて確認するに留めたいと思います。

『徒然草』第十九段は、「折節の移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ」という有名な発語に始る季節の情趣を列記した章段ですが、

言ひ続ければ、みな源氏物語・枕草子などにこと古りにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつつ、あぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

と、『大鏡』を引きつつ、「言わねばいられないこと」があるから言う、書かねばいられない衝動があるから書く、という、書記行為の本質を述べています。

同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなく言ひ慰まれんこそうれしかるべきに、さる人あるまじけれど、つゆ違はざらむと向かひたらむは、ただひとりある心地やせん。互ひに言はむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、いささか違ふ所もあらむ人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひ、憎み、「さるからさぞ」ともうち語らば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつ方も我と等しからざらぬ人は、大方、よしなしごと言はむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、はるかに隔つところのありぬべきぞ、わびしきや。(十二段)

自分と隅から隅まで同じ心を持った人間などいるはずもない、という断念と、その結果のわびしさを、かくも明瞭に述べた文章はなかなかお目にかかれないでしょう。もちろん、この文言は、『伊勢物語』第百二十四段の、「思ふこと言はでぞただにやみぬべき我と等しき人しなければ」を踏まえているのですが、こうした完全なる同心者の不在は、「人と向かひたれば言の葉多く、身もくたびれ、心も閑かならず」（第百七十段）ということになり、その結果、「ひとり灯火の下にて文をひろげて、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり」（第十三段）というように、書物の中に逃げ込む以外に道がなくなるのです。

かくて、兼好法師はよき古典の読者となるでしょうが、それが即、すぐれた書き手となることを保証するものではありません。

では、兼好法師はいかにして、よき語り手・書き手へと変貌したのでしょうか。今、私にそれに答える用意はありません。それは、これからの解明を待っている大きな課題であると思います。やがて、こうした問題に対する解明も行なわれるであろう事を期待して、本日の取り留めのない話の締めくくりとしたいと存じます。ご清聴ありがとうございました。